

# SHOW HEY シネマールーム

★★★★★

## クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男

2019年/アメリカ映画  
配給：ショウゲート/101分

2023 (令和5) 年8月19日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data

2023-98

監督：タラ・ウッド

出演：ゾーイ・ベル/ブルース・ダ  
ーン/ロバート・フォスター  
/ジェイミー・フォックス/  
サミュエル・L・ジャクソン  
/ジェニファー・ジェイソ  
ン・リー/ダイアン・クルー  
ガー/ルーシー・リュー/マ  
イケル・マドセン/イーラ  
イ・ロス/ティム・ロス/カ  
ート・ラッセル/クリスト  
フ・ヴァルト

## 👁️👁️ みどころ

私はクエンティン・タランティーノ監督が大好き！『キル・ビル vol.1』(03年)は日本びいきの彼なればこそその作品だが、その斬新性と独創性に大拍手！これぞエンタメ！と感激していると、その後、あっという間に「鬼才」から「巨匠」に成長したからビックリ！

もっとも、28年間の監督生活ながら、作品数はわずか8本だし、「10本撮れば引退する」と公言しているから、近時、91歳で90作目の『こんにちは、母さん』(23年)を監督した日本の巨匠・山田洋次等とは大違いだ。

そんな現役監督(巨匠)のドキュメンタリー映画を作るのは難しい。なぜなら、下手すると“提灯持ち映画”になりかねないからだ。そこで、タラ・ウッド監督は本作にタランティーノ本人を一切登場させず、これまでの出演者やスタッフたちの身近かつ本音の“証言”で構成！さあ、そこから浮かびあがってくる鬼才・タランティーノの本質(本性?)とは？

おっと、本作はタランティーノの2つの“恥部”にも少しだけ触れているので、それに注目！その第1は、彼の映画制作の長年の盟友で“実力者”だったワインスタイン氏のセクハラ疑惑の発覚！第2は、ユマ・サーマンが撮影中の事故のために女優生命を断ったことだ。この2点につき、彼はいかなる弁明を？「俺は知らなかった」では通用しないこと明らかだが、さて・・・？

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■誰が撮るの？それが大問題！人によって如何ようにも！■□■

私はアニメより実写映画が好き、またドキュメンタリーよりもフィクション映画の方が好きだ。しかし、稀にドキュメンタリー映画の中には、絶対に見逃してはならないと思わせる貴重なものがあるので、それは例外だ。最新の『シネマ53』に、私は、①『独裁者た

ちのとき』(22年)と、②『プーチンより愛を込めて』(18年)を収録する予定だが、前者はアレクサンドル・ソクーロフ監督がヒトラー、スターリン、チャーチル、ムッソリーニを「独裁者」と断じた上、すべてアーカイブ映像のみで構成した異色の作品だった。また、後者はタイトルとは裏腹に、監督、脚本、撮影、出演したヴィタリー・マンスキーが、1999年12月31日の、ロシア連邦初代大統領ボリス・エリツィンの引退宣言によって実現した、第2代大統領選挙を巡るドラマを撮影したドキュメンタリー映画で、まさに“こりゃ必見”のドキュメンタリー映画だった。

他方、『モリコーネ 映画が恋した音楽家』(21年)、『シネマ52』155頁)は、「荒野の用心棒」等の映画音楽を生み出した作曲家、エンニオ・モリコーネをして、「ジュゼッペが撮るならやってもいいが、彼以外ならダメだ」と言わしめた結果、ジュゼッペ・トルナトーレ監督の手で実現したドキュメンタリー映画だ。そして、『ニュー・シネマ・パラダイス』(88年)以降、全作品でタグを組んだ盟友ジュゼッペ・トルナトーレ監督なればこそその演出はさすがだった。また、『カンフースタントマン 龍虎武師』(21年)、『シネマ52』255頁)は、特定の映画スターではなく、ジャッキー・チェン主演の『酔拳』(78年)をはじめ、80年代の『少林寺』シリーズや90年代の『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・チャイナ』シリーズ等々を支えた香港スタントマンに焦点を当てて、ウェイ・ジェンツー監督が完成させた、メチャ面白いドキュメンタリー映画だった。

私は『キル・ビル vol.1』(03年)、『シネマ3』131頁)でクエンティン・タランティーノ監督を知ってから大ファンになり、その後のすべての作品を観ているが、デビュー作を含め、それ以前の作品は1本も観ていない。タランティーノ監督には必ず“鬼才”という冠(形容詞)がつくが、それは一体なぜ?そんな巨匠にして鬼才、タランティーノのドキュメンタリー映画を作るのは難しい。なぜなら、下手すると、タランティーノを褒め上げるだけの“提灯持ち映画”になりかねないからだ。もし、本作がそんな映画なら、誰も見ないはず。つまり、ドキュメンタリー映画は誰が撮るか?それが大問題なのだ。ドキュメンタリー映画は誰が撮るかによって、如何ようにも・・・!

## ■□■本人抜きで!関係者だけの身近かつ本音の証言で構成!■□■

本作の監督を務めた女性はタラ・ウッド。と聞いても、私は彼女の名前を全然知らなかったが、チラシには『「6才のボクが、大人になるまで。」のリチャード・リンクレイター監督のドキュメンタリー映画でも高く評価された』と書かれている。そこで、ネット情報を調べてみると、彼女は本作の制作経緯を振り返り、「リチャード・リンクレイターのドキュメンタリーを撮っていた際、タランティーノについて話題が多く挙がり、それが自然な流れになったという感じです」と述べ。また、タランティーノ本人が登場しない手法について、「ほかのドキュメンタリーと違うのは、ほかの人たちを通してその人物を知ることです。私はそのほうが面白いと思っています。映画遍歴にフォーカスしているということ、そして、暴露話を取り上げないということ。タランティーノはそれが気に入ったよ

うです。以前にもドキュメンタリーを撮りたいと彼にアプローチした人たちはいますが、タランティーノは決してOKしませんでした」と述べているから、なるほど、なるほど。

『6才のボクが、大人になるまで。』（14年）（『シネマ35』46頁）は、“6才のボクが18才になるまで”の12年間をずっと同じ俳優で撮影するという、リチャード・リンクレイター監督の異例のドキュメンタリー映画だったが、前述の通りタラ・ウッド監督は、本作ではタランティーノ監督を一切撮影の対象とせず、第1作から第8作目の『ヘイトフル・エイト』（15年）（『シネマ37』40頁）までに出演した俳優たち、プロデューサーやスタッフたちだけによる、身近で本音の証言を集めることによって構成した。そのため、本作には約10名のごく親しい関係者たちによるタランティーノのさまざまな逸話と、秘話がタブーなしで満載されている。なるほど、なるほど、こりゃ面白そう！こりゃ必見！

## ■□■これまでわずか8本で巨匠に！しかも10本で引退！？■□■

山田洋次監督は『男はつらいよ』シリーズだけで計50作。91歳で撮った最新作、『こんにちは、母さん』（23年）で90作目の日本の巨匠。しかし、タランティーノ監督はこれまでわずか8作しか撮っていないにもかかわらず、既に“巨匠”。しかも「10作作ったら引退」と公言しているからすごい。もともと、これまでに撮った映画は8作だが、その期間間は1992年から2019年まで、28年間に及んでいるからその実績は十分だ。

彼の映画人としての軌跡をドキュメンタリー映画にするについてタラ・ウッド監督は、第1章「革命」、第2章「強い女性&ジャンル映画」、第3章「正義」に分けて構成している。その第3章は『イングリシアス・バスターズ』（09年）（『シネマ23』17頁）、『ジャンゴ 繋がれざる者』（13年）（『シネマ30』41頁）、『ヘイトフル・エイト』の3本であること、第2章のメインが『キル・ビル vol.1』、『キル・ビル vol.2』（04年）（『シネマ4』164頁）であることは明確だが、残念ながらこの4本（『キル・ビル』は1本として計算）以外を私は観ていない。しかし、第2章では『キル・ビル vol.1』、『キル・ビル vol.2』以外の『ジャッキー・ブラウン』（98年）と『デス・ブルーフ in グラインドハウス』（07年）の2作を、第1章では、低予算で制作したデビュー作、『レザボア・ドッグス』（92年）と、第2作『パルプ・フィクション』の2本を取り上げている。

私は本作を非常に興味深く鑑賞したが、やはり、自分が素晴らしい作品だと思った『キル・ビル』、『イングリシアス・バスターズ』、『ジャンゴ 繋がれざる者』、『ヘイトフル・エイト』についての本作に見る関係者の証言は興味深かった。逆に言うと、私が観ていない1章の2本、2章の『キル・ビル』以外の2本については、本作だけを見てもあまり興味は湧かなかった。

ちなみに、本作については、ネタバレを含むネット上の記事は多い。その中の一つ「#映画感想文 270『クエンティン・タランティーノ 映画に愛された男』（2019）」は「正直に告白すると、私はタランティーノの作品を一作もきちんと見たことがない。・・・。一時期はカルト的に人気があり、崇拜もされていた人なので、勉強として観に行った。」として

いるが、タランティーノ作品そのものを観ていないまま本作を観てもきっと面白くなかっただろう。タランティーノ監督を知るためには、やはり彼が作った“ホンモノ”を観なければ！本作のようなドキュメンタリー映画は、あくまでホンモノを観た上で、その秘話や逸話を知ればより面白く、より興味が湧くだろう、という位置づけだ。

## ■□■ T 監督には重大な恥部が！本作はそれをどう撮ったの？ ■□■

功成り名を遂げた人間が、世間から称賛の声を浴びたままあの世に旅立てれば幸せだが、織田信長のように志半ばで謀反によって無念の最期を遂げたり、ジャニー喜多川のようにある事実（事件）の発覚によって、一気に晩節を汚してしまうこともある。ジャニー喜多川による“性的被害”は日本国内に限ったものだが、そのアメリカ版、国際版の“大セクハラ問題”の張本人が、タランティーノ監督の25年間にわたる映画制作の中で一貫して蜜月関係にあった、ミラマックスのワインスタイン氏だから、タラ・ウッド監督は、そんなタランティーノ監督の“恥部”を本作でどう撮ったの？

また、私はタランティーノ作品では何と言っても『キル・ビル』が1番好きだし、同作で見たユマ・サーマンのカッコ良さは今でも目に焼き付いている。しかし、ユマ・サーマンはタランティーノ映画のある撮影の中で大変な事故に遭い、女優生命を断たれてしまうことに……。本作にはその逸話、秘話も少し登場するので、それにも注目！

ちなみに、本作ラストには「ワインスタインがやっていたことを知らなくて自分も傷ついている」とのタランティーノの声明が引用されるが、それって、少しズルいのでは・・・？つまり、今風の日本の流行り言葉風に言えば、それって、タランティーノは問題の本質に真摯に向かい合っていないということになるのでは・・・？

2023（令和5）年8月24日記